慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	頼春水『負剣録』諸本考 : 近世後期漢文紀行の成立とその流通
Sub Title	
Author	浅井, 万優(Asai, Mayu)
Publisher	慶應義塾大学国文学研究室
Publication year	2022
Jtitle	三田國文 No.67 (2022. 12) ,p.90- 108
JaLC DOI	10.14991/002.20221200-0090
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00296083-20221200-0090

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

頼春水『負剣録』諸本考

――近世後期漢文紀行の成立とその流通――

浅井　万優

はじめに

本稿は、頼春水の漢文紀行『負剣録』について、諸本を網羅的に調査し、本文の系統分類について総合的な知見を示すものである。

『負剣録』は、春水が、明和七年（一七七〇）に、父と共に東日本を旅したときの紀行であり、春水の伝記や交友を考える上でも、あるいは、江戸後期の漢文のあり方を理解する上でも、重要な資料である。

この『負剣録』については、これまで諸本分類について議論が重ねられてきた。『負剣録』は、近世・近代を通じて写本のかたちで流布し、今日、十八点の諸本が確認できるが、諸本間には、構成やテキストの異同などの点で違いがあり、その先後関係を含め、中野三敏氏をはじめ、諸氏により様々な推定がなされてきたが、いまだ諸本全体の調査に基づいた明確な分類は提示されていない。また、諸本の先後関係を考える際、最も重要な手がかりとなるのは、広島県竹原市の頼家春風館に所蔵される自筆の稿本類であるが、これらの資料も、なお十分に検討されていない。

ここでは、自筆稿本類を含め、諸本を可能なかぎり調査した上で、写本の書承のあり方について新たな知見を提示する。結論を先に言うならば、なお課題は残るものの、『負剣録』については、諸本の紀行本文を、自筆稿本のテキストと比較してどれほど離れているかを分析すると、諸本をより整合的なかたちで分類できるように思われる。

まず、考察の前提として、今回、調査し得た『負剣録』の諸本を一覧する。それぞれの資料に番号を付しているが、これは、本論の最終的な分類に基づくものである。すなわち、諸本には、筆者が想定する系統及び書写年代を基準として番号を振っている（詳細は後述）。

①「自筆文稿」（春風館蔵、頼山陽記念文化財団寄託）・②「自筆詩稿」（同）③「自筆浄書本」（同）・④頼山陽史跡資料館蔵本・⑤『春水遺響』所収本（未見）[1]・⑥『崇文叢書』所収本[2]・⑦早稲田大学図書館蔵本・⑧酒田市立光丘文庫蔵本・⑨慶應義塾大学図書館蔵本・⑩謄写版本[3]・⑪大阪大学

附属図書館懐徳堂文庫蔵本・⑫九州大学附属図書館雅俗文庫蔵本・⑬国立国会図書館鶚軒文庫蔵本・⑭広島市立中央図書館浅野文庫蔵与楽園叢書本・⑮三原市歴史民俗資料館蔵本・⑯大東急記念文庫蔵本・⑰山口県立大学図書館桜圃寺内文庫蔵本・⑱『世界』所収本[4]

次に、『負剣録』の構成について説明する。『負剣録』は、序跋の有無などの点で諸本によって違いがあるが、最も多くの要素を備えた⑭与楽園叢書本に拠って説明する。最初に、田中鳴門の安永二年（一七七三）の序があり、次に紀行の本文が記される。続いて、旅中に作られた漢詩を収載した部分（以下、「付録詩」と呼ぶ）があり、頼春風の跋（明和七年）、頼杏坪の題詩二首が載る。こうした付録詩や序跋などの要素は、諸本により、ある場合、無い場合の両方があり、結果として『負剣録』の内容を多様なものとしている。

従来の研究は、紀行本文・序跋・付録詩・上下巻の別などの諸要素の有無を総合的に勘案して諸本を分類しようとしていた。これに対して、本論は、紀行本文の異同に基づき、諸本の分類を行った上で、その他の要素の有無について考えてゆくというアプローチを取る。

これは、紀行の文章の違いの方が、より本質的な『負剣録』のテキストの変化を表しているように思われるからである。具体的に言えば、諸本間で紀行全体にわたる本文の異同があった場合、それは著者である春水自身の手になる改稿を反映している可能性が高い。これに対して、序跋や付録詩の有無については、書写者によって、便宜的に省かれるなどのことも考えられるからである。

なお、識語などの情報についても、『負剣録』が、一旦、著者の手を離れた後の、流通の状況を伝えるものであって、テキスト生成の過程を直接的に示すものではない。これについても、紀行本文の異同による考察を経た後に、その知見とともに諸本の考察に生かされるべきものと考える。

本稿では、『負剣録』の諸本について、紀行部分の異同について精査し、それらが大きく三系統に分類できることを示す。その後、自筆稿本類におけるテキストとの比較によって、その先後関係を明らかにし、さらにそれが付録詩や序跋の有無などの状況とも矛盾しないことを確認する。最後に、識語などの書写・流通に関する情報を加え、『負剣録』の諸本について、総合的に分析する。

一　先行研究における考え方

まず、『負剣録』の諸本の分析について、先行研究によって得られた知見とその限界について論じてゆく。

『負剣録』のテキストに異同があることは、すでに、頼惟勤氏、中野三敏氏、多治比郁夫氏によって指摘がなされている。次に掲げる三篇の論考がそれにあたる。

頼惟勤「宝暦明和以降浪華混沌詩社交遊考証初篇」（『日本漢学論集』、汲古書院、二〇〇三年〈初出：一九六二年〉）

中野三敏「「葭の根屑」掘りのこし」（『混沌』第四号、混

沌会、一九七七年五月）

多治比郁夫「『負剣録』の付詩六十九首本」（『京阪文藝史料』第一巻、青裳堂書店、二〇〇四年〈初出：一九八一年〉）

三氏は、互いの研究を参照しながら、この作品のバリエーションについて認識を更新してきた。しかし、これまでの議論は、『負剣録』の写本全体を網羅的に調査した上で出た結論ではない。また、本文の先後の判定にはやや不可解な点もある。以下、研究の経過とともに見てゆこう。

まず、検討の対象となる写本が研究の過程で増加し、最終的に計七本となっている。具体的には、頼惟勤氏が、⑤『春水遺響』所収本・⑥『崇文叢書』所収本、⑭与楽園叢書本・⑱『世界』所収本の四本を分析し、中野三敏氏は、自身の所蔵する本（現⑫雅俗文庫蔵本）及び⑰桜圃寺内文庫蔵本など、計五本を対象とし、さらに多治比郁夫氏は、新たに⑪大阪大学懐徳堂蔵本を考察している。

諸本の分析の手法も、研究の過程でしばしば更新がなされた。頼氏は、その本が、紀行のみで構成されるか、紀行の後に「附録」として詩の部も有しているかの別によって、諸本の系統を考えている。中野氏は、こうした詩の部の有無という視点に加え、付録詩の数、序跋の有無、上下巻の分割の有無、紀行部分のテキストの異同を、新たに考察のポイントに加えた。多治比氏は、詩の部分の字句の違いも視野に入れつつ分類を行っている。

これらの考察においては、異なるテキストの間の先後関係についても言及がなされており、たとえば、中野氏は、『負剣録』の紀行本文の異同について、文章の「繁」と「簡」という基準によって考え、諸本の先後関係を決定している。具体的に述べるならば、『負剣録』の五月三日の条を挙げながら、「最繁のこの書（筆者注：中野氏所蔵のもの、現在の⑫雅俗文庫蔵本）を三本中最も草稿に近いものとし、次いで崇文叢書本から与楽園本へと修辞されたものという判断も上来（ママ）ようが（略）」と述べている。

以上の三氏の研究の概要を、表にまとめると次のようになる。

【表1】『負剣録』についての先行論文における調査範囲と見解

	調査対象資料	判断の基準
頼惟勤	⑤『春水遺響』所収本 ⑥『崇文叢書』所収本 ⑭与楽園叢書本 ⑱『世界』所収本	・付録詩の有無
中野三敏	⑥『崇文叢書』所収本 ⑫雅俗文庫蔵本 ⑭与楽園叢書本 ⑰桜圃寺内文庫蔵本 ⑱『世界』所収本	・付録詩の有無 ・詩の数 ・序跋の有無 ・上下巻に分かれているか ・紀行本文の異同
多治比郁夫	⑪懐徳堂文庫蔵本 ⑫雅俗文庫蔵本	・付録詩の有無 ・詩の数

	⑭　与楽園叢書本	・序跋の有無 ・上下巻に分かれているか ・紀行本文の異同 ・詩句の異同

論旨
付録詩の有無を基準に、次の二グループに分類。 ・⑭与楽園叢書本・⑱『世界』所収本（詩あり） ・⑤『春水遺響』所収本・⑥『崇文叢書』所収本（詩なし） 紀行本文について、繁から簡へ修正されたかと考え、次のように推定（ただし、この繁から簡へという基準では十分に説明できないことも指摘）。⑫雅俗文庫蔵本→⑥『崇文叢書』所収本→⑭与楽園叢書本 中野氏の研究を踏襲しつつ、新たに⑪懐徳堂文庫蔵本を調査に加え、⑫雅俗文庫蔵本・⑭与楽園叢書本と⑪懐徳堂文庫蔵本とでは詩の数が異なることを指摘。

ただ、こうした検討の積み重ねに問題がなかったわけではない。まず、現在確認される一八本という諸本の数と比較すると、七本のみで考察するというのは必ずしも十分とは言えない。また、分類に示された基準はそれぞれに有益なものであるが、全体として整合的な解を得られていない。先後関係についても、文章の修正が「繁」から「簡」になる方向で行われたかは疑問である。文章を推敲する際、ある箇所では、より詳密になることもあれば、別の箇所では簡素になることもあるだろう。

二　春風館に所蔵される自筆稿本類の存在

以上に見たとおり、これまでの研究には、調査の範囲、分類の基準などにいずれも検討すべき余地が残されていたが、最も大きな問題は、自筆の草稿など、春水の手によって成った、早い段階での稿本が考慮に入れられていなかった点であろう。『負剣録』の原初の形態を知ることができるならば、それとの比較によって、自ずと諸本分類及びその先後関係は推定できるからである。

実は、この点については、すでに頼氏が、先掲したものとは別の論考の中で、次のように、自筆の草稿の存在を指摘されていたが、詳細な調査は行われていなかった。

> この書（筆者注：『負剣録』のこと）のテキストについては、附載の詩の首数を目安に分類できることが近年判明してきたが、なお別に、著作の際の手控えとして「稿本」と題する冊子があり、『入蜀記』などを手本にしていることがわかる。
>
> （「趙陶斎と平賀中南」『日本漢学論集』前掲、〈初出：一九八二年〉）

頼氏の指摘した「稿本」は、現在、春風館蔵の『負剣録』の自筆の草稿として伝えられており、頼山陽記念文化財団に寄託されている。この草稿を含め、春風館には三点の『負剣録』関係の自筆の写本が伝わっている。これらは、成立の段階などや

性質を異にするが、いずれも『負剣録』執筆のごく初期に作られたものである。今、その書誌を略述する。

なお、これらの資料は、それぞれ外題や内題などから書名を拾うことはできるが、他の写本との混同を避けるために、本稿では、便宜的に、「自筆文稿」、「自筆詩稿」、「自筆浄書本」と呼ぶことにする。

①「自筆文稿」（春風館蔵）一巻一冊。〔明和年間〕写。
書形　大本（二七・〇×一六・二）。
表紙　原装共紙表紙。
外題　「負剣録稿本」（左肩に打付書）
本文　内題ナシ。本文冒頭「明和七年、東遊而帰成乃之志也。乃公当謂我生東方未嘗……」。本文冒頭七～十三行×四十五字程度。
『負剣録』の草稿（二十丁）、漢籍からの語句の抜書（十丁）、「天野屋利兵衛伝」（四丁）の三点の、いずれも春水自筆ながら、料紙が異なる資料を合綴する。紀行の草稿とみられる断片的な記事が書かれている。推敲の跡が著しい。字は行草で、略式に書かれている。草稿の途中に「入蜀記の抄書」と題された箇所があり、『入蜀記』の字句が抜粋される。
丁数　三十四丁。

②「自筆詩稿」（春風館蔵）一巻一冊。〔江戸後期〕写。
書形　大本（二七・七×一九・一）。
表紙　原装共紙表紙。
外題　「負剣録　附録」（四周単辺の枠を墨書した題簽を用いる。左肩）。
本文　内題ナシ。本文冒頭「（低一格）詩六十九首／（低二格）留別／（低一格）告別豈同別筵待輿千里意相憐泛舟松島三秋／……」。印刷した罫紙を用いる。四周単辺有界、九行二〇字。
柱部分に墨書で「四十二（～五十二）」。詩六十七首を収録する。紀行本文はない。推敲の跡がみられる。罫紙に楷書体で書かれており、整っている。裏表紙に墨書で「負剣録題言」とあるが、該当する本文はない。
丁数　十二丁。
書き入れ・蔵書印等　詩本体や頭注欄に朱筆で圏点・批点が書き込まれる。朱筆・藍筆で評が書き込まれる。

③「自筆浄書本」（春風館蔵）一巻一冊。〔江戸後期〕写
書形　大本（二六・九×一七・七）。
表紙　原装茶色無地表紙。
外題　外題「負剣録」（左肩刷枠題簽（四周単辺）に墨書）。
本文　内題「東遊負剣録」。本文冒頭「明和七年五月二日晩舟溯淀水會士徳有事于京同／……」。印刷した罫紙を用いる。四周単辺有界、一〇行一一字。推敲の跡はなく、字が丁寧に記されている。
丁数　三十五丁。
書き入れ・蔵書印等　所々に評が書き込まれた付箋あり。

最終丁裏に墨書で詩二首（「江戸寄弟」「松島寄浪華諸友」）が書き込まれた付箋が貼付されている。詩部冒頭「五十三亭入武州関山無恙此淹留挿天富嶽芙蓉／……」詩については、字が乱れている。

このうち、「自筆文稿」と呼ぶものについて、これは、旅行中の出来事を記した断片的な記事が書かれており、おびただしい推敲の跡が見られる。また、中国の遊記からの語句の抄出など、文章構想の段階で使用したと思われる記述も多く、いわば、『負剣録』が成る以前の粗稿とみなすことができる。「自筆詩稿」は、推敲の跡などが見えるが、楷書体の整った字で書かれており、紀行本体を欠く。これも、『負剣録』の成稿とは呼べないものである。

一方、「自筆浄書本」と呼ぶべきものがある。これは紀行本文と詩二首を収録している。ただし、この詩二首は、詩が付箋に書かれ、それが巻末に貼り付けられており、おそらく、後人の手によって付されたものと考えられる。また、紀行本文については、字が丁寧に記されており、浄書されたものと考えられ、一応の完成を見た段階のものと推定できる。

三　本文による系統分類―「自筆文稿」との距離から考える

春水自筆の稿本類について確認したところで、ここからは、実際に紀行の本文の異同を基準に諸本を分類してゆく。結論から先に言えば、現在確認できる諸本を見る限り、本文は、一部例外的な箇所もあるが、おおむね三種類に分け得るように思われる。まず、この点について、冒頭部分を例に見てゆこう。冒頭部分は、淀川を経由して京都へ向かう場面である。

今、三つの系統を仮にA・B・Cと名付けるならば、次のように分類することが可能である。なお、訓読は、「自筆浄書本」にのみ記した。

A系統（③「自筆浄書本」）
明和七年五月二日、晩舟遡淀水。会士徳有事于京。同舟而往。終夜把酒。亦惜余別也。

（明和七年五月二日、晩に舟して淀水を遡る。士徳の事の京に有るに会す。同舟して往く。終夜酒を把る。亦た余が別を惜しむなり。）

B系統（⑪懐徳堂文庫蔵本）
明和七年五月二日、晩舟遡淀河。士徳適有事于伏見。同舟而往。終夜把酒。亦惜余別也。

C系統（⑬鶚軒文庫蔵本）
明和七年五月二日、晩舟遡淀河。士徳適有事于伏見。同舟而往。亦惜余別也。

この記事には、いくつかの異同が見られる。具体的には、点線傍線部に見られるように、③の「遡淀水」は、⑪・⑬では「遡淀河」になっている。また、傍線部のように、③の「京」は、⑪・⑬では「伏見」になっている。さらに、二重傍線部のように、③・⑪の「終夜把酒」は、⑬にはない。こうした違いは、

おおむね本文すべてに共通しており、全体にわたる特徴と言い得る。

ここでは、それぞれの系統の代表的な本を掲げたが、たとえば、A系統であれば、他に④頼山陽史跡資料館蔵本・⑥『崇文叢書』所収本などもまったく同じ本文を持っている。このように、紀行本文の異同に基づいて十八点の諸本を分類すると、次のような結果が得られるのである。

A系統
③「自筆浄書本」（同）・④頼山陽史跡資料館蔵本・⑤『春水遺響』所収本（未見）・⑥『崇文叢書』所収本

B系統
⑦早稲田大学図書館蔵本・⑧酒田市立光丘文庫蔵本・⑨慶應義塾大学図書館蔵本・⑩謄写版本・⑪大阪大学附属図書館懐徳堂文庫蔵本・⑫九州大学附属図書館雅俗文庫蔵本

C系統
⑬国立国会図書館鶚軒文庫蔵本・⑭広島市立中央図書館浅野文庫蔵与楽園叢書本・⑮三原市歴史民俗資料館蔵本・⑯大東急記念文庫蔵本・⑰山口県立大学図書館桜圃寺内文庫本・⑱『世界』所収本

それでは、このA・B・Cの三系統の先後関係については、どのように考えてゆけばよいのであろうか。ここで重要となるのが、自筆の草稿における記述である。次に「自筆文稿」の五月二日の記事を掲げる。

①「自筆文稿」
五月二日、晩舟到于伏見。会士徳有事于京。同舟而往。終夜把酒。亦惜余別也。

A・B・C系統の本文と「自筆文稿」の本文とを比較すると、A系統は「自筆文稿」と最も近く、「自筆文稿」・A系統にみえる「京」は、B・C系統では、「伏見」となっている。また、伏見に赴いた後、一晩中酒を飲んだ「終夜把酒」という記述は、「自筆文稿」を含め、C系統以外のすべてに見られる。これらを組み合わせて考えるならば、A系統が最も稿本に近いテキストであり、B系統、C系統に行くほど離れてゆくことが明らかである。

こちらも同様の例は、紀行本文の各所に見られ、例外は、後述するが、⑫雅俗文庫蔵本に一例があるのみである。したがって、「自筆文稿」からの距離を考えた場合、「自筆文稿」の要素を最も多く含むA系統が、三系統のうち最も早く成立し、次いでB系統、最後にC系統が成立したと考えられるのである。

四　付録詩・序跋の有無・上下巻の有無をどう考えるか

ここまで、本文の異同に基づいて諸本を整理してきたが、これによって得られた知見と、その他の観点、具体的には、付録詩の数、序跋の有無、上下巻の分割の有無といった視点に基づく分析とは、どのような関係にあると言えるだろうか。

結論から先に述べると、それぞれの観点からなされる諸本の

分類と、これまでに見た本文の異同による分類とは、全てにおいて整合的に合致するということはないが、全体として齟齬をきたすような要素は、現段階では見当たらないということができる。以下、それぞれの観点について、各節で順に述べてゆく。

四－一　付録詩の有無および収録詩数と詩句の異同

まず、付録詩の有無について、諸本の違いを見てゆく。この要素については、A系統にはなく、C系統にはあるというように系統ごとに明確に分類できる。一方、B系統については、付録詩のないものとあるものとが存在する。具体的には、⑦早稲田大学図書館蔵本、⑧光丘文庫蔵本、⑨慶應義塾大学図書館蔵本、⑩謄写版本には付録詩がなく、⑪懐徳堂文庫蔵本、⑫雅俗文庫蔵本が付録詩を有する。

【表2】　各系統における付録詩の有無および収録詩数

		本文系統	付録詩
①	「自筆文稿」		×
②	「自筆詩稿」		六十七首
③	「自筆浄書本」	A	×
④	頼山陽史跡資料館蔵本	A	×
⑤	『春水遺響』所収本　※未見	(a)〔A〕	―
⑥	『崇文叢書』所収本	A	×
⑦	早稲田大学図書館蔵本	B	×
⑧	光丘文庫蔵本	B	×
⑨	慶應義塾大学図書館蔵本	B	×
⑩	謄写版本	B	×
⑪	懐徳堂文庫蔵本	B	六十三首
⑫	雅俗文庫蔵本	B	二十八首
⑬	鶚軒文庫蔵本	C	五十九首
⑭	与楽園叢書本	C	五十八首
⑮	三原市歴史民俗資料館蔵本	C	五十八首
⑯	大東急記念文庫蔵本	C	五十九首
⑰	桜圃寺内文庫蔵本	C	五十九首
⑱	『世界』所収本 ※15～18巻のみ確認済み	C	〔五十九首〕

a〔　〕で囲んだものは推定されるという意味であり、これ以降に掲げる表で用いる場合も同様である。

以上のように、詩の有無という観点から見た場合、A系統及びC系統については、A系統には付録詩がなく、C系統には付録詩があるというように、本文に基づく系統分類と完全に一致する。

一方、B系統については、付録詩のないものとあるものとが存在する。これが、どのような経緯で起こったのかということについては、後に推測を記すが、具体的には、⑦早稲田大学図

書館蔵本、⑧光丘文庫蔵本、⑨慶應義塾大学図書館蔵本、⑩謄写版本には付録詩がなく、⑪懐徳堂文庫蔵本、⑫雅俗文庫蔵本には付録詩が確認できる。

このように、A系統には付録詩がない、あるいは、B系統内で差異がある理由としては、もともと分離していた紀行本文と付録詩が、B系統のある段階で一体となった可能性が高い。このことは、次に述べる二つの点から明らかである。まず、付録詩の最も初期の形態と思われる「自筆詩稿」の様相について、外題に「負剣録　附録」と記され、丁数が一丁からではなく、四十二丁から始まっている。このことから、「自筆詩稿」は、紀行本文の付録として構想されていたと考えられる。

さらに、詩の数の変遷を考慮した場合、「自筆詩稿」は、巻頭に「詩六十九首」と明記されている（実際には六十七首を収録する）が、B系統の⑪懐徳堂文庫蔵本の付録詩部分にも同様に、「負剣録附詩六十有九首」とある（実際には六十三首を収録する）。さらに、B系統の雅俗文庫蔵本の付録詩部分の冒頭にも、「附詩〈旧稿六十有九首／今采二十有七首〉[5]」とある（実際には二十八首を収録する）。つまり、B系統において、「自筆詩稿」あるいはそれに類する六十九首を収録する本が参照され、付録詩の部分が付加されたと考えられるのである[6]。

なお、C系統は、すべての本に詩が付されるが、詩の数は、いずれも五十九首もしくは五十八首[7]であり、B系統の⑪懐徳堂文庫蔵本や⑫雅俗文庫蔵本のように、もとは六十九首であった旨は明記されない。

ここまで見てきたように、付録詩の有無および収録詩数による諸本の分類と、紀行本文による諸本の分類は、矛盾するものではない。ただ、B系統に関しては、付録詩のないものとあるものとでさらに細かく分かれることとなる。

四－二　詩の字句の異同

次に、詩の字句の異同については、紀行本文と同じように、BとCの二系統に分けることができ、その先後関係も、紀行本文と同一であると考えられる。なお、繰り返しとなるが、そもそもA系統には詩が載っていない。

ここでは、詩の字句の異同から先後関係を考える。一例として、付録詩に収載された詩のうち、「過藤花菴（藤花庵に過ぎる）」について、「自筆詩稿」によって構想段階の詩のあり様を確認し、それとB・C系統の詩とを比較する。なお、訓読は、「自筆詩稿」にのみ記した。

稿本段階（②「自筆詩稿」）

過藤花庵

藤花落尽合歓華、又見忘憂草繚家。幽勝去年遠題句、漫遊何夕此停車。龍池隔樹波涵座、鳥海当窓雪在紗。幽興帰来誇我社、各天千里夢魂賒。

（藤花 落ち尽して 合歓華、又た見る 忘憂草 家を繚るを。幽勝 去年 遠く句を題し、漫遊 何の夕ぞ 此に車を停む。龍池 樹を隔てて 波は座を涵し、鳥海 窓に当たりて雪は紗に在り。幽興 帰来 我が社に誇らん、各おの天千里 夢魂賒かなり。）

B系統（⑪懐徳堂文庫蔵本）
過藤花菴
藤花落尽合歓華、更見忘憂草繚家。幽勝去年遠題句、漫遊何夕此停車。龍池隔樹波涵座、鳥海当窓雪在紗。幽興帰来誇我社、各天千里夢魂□[8]。

C系統（⑬鶚軒文庫蔵本）
過藤花菴
藤花落尽合歓華、更見忘憂花繚家。幽勝多年遠題句、漫遊何夕此停車。龍池隔樹波涵座、鳥海当窓雪在紗。帰日高情誇我社、各天千里夢魂賒。

詩は、春水が酒田に滞在中に訪れた、友人曽根原魯卿の別荘について詠ったものである。傍線部について、「自筆詩稿」では「又」の字を「更」に修正した跡があり、この修正がB系統・C系統に反映されている。ここから、「自筆詩稿」がB系統・C系統に先行するテキストであることがわかる。

さらに、二重傍線部について、詩稿とB系統は「幽興帰来誇我社（幽興 帰来 我が社に誇らん）」となっているが、C系統は「帰日高情誇我社（帰日 高情 我が社に誇らん）」となっている。この点を考えるならば、B系統は、詩稿の要素をより多く含む、C系統に先行するテキストであると判断される。

以上のような変化は、他の詩、例えば「逢阪留別平紀宗」、「日本橋」、「大山過田鳳」などにも確認でき、これらの字句の異同はすべて自筆詩稿→B→Cの順番で成立したと理解できるのである。

四－三　序跋の有無

序跋の有無についても、A系統及びC系統については、A系統には序跋がなく、C系統にはあるというように、こちらも本文の分類と一致する。[9]

一方、B系統については、系統内で差異がある。⑦早稲田大学図書館蔵本・⑧光丘文庫蔵本・⑨慶應義塾大学図書館蔵本は序跋をもたない一方で、⑫雅俗文庫蔵本は田中鳴門の序と頼春風の跋を有し、⑪懐徳堂文庫蔵本が頼春風の跋と頼杏坪の題詩を有するなど、出入りがある。B系統のこれらの違いについて、なぜこうした現象が起こったのか、現時点では明らかにし得ない。[10]

【表3】　各系統における序跋の有無

	序 田中鳴門 （安永二年）	跋 頼春風 （明和七年）	題詩 頼杏坪
①「自筆文稿」	×	×	×
②「自筆詩稿」	×	×	×
③「自筆浄書本」	×	×	×
④頼山陽史跡資料館蔵本	○	○	○（二首）
⑤『春水遺響』所収本 ※未見	―	―	―
⑥『崇文叢書』所収本	×	×	×

⑦	早稲田大学図書館蔵本	×	×	×
⑧	光丘文庫蔵本	×	×	×
⑨	慶應義塾大学図書館蔵本	×	×	×
⑩	謄写版本	×	×	×
⑪	懐徳堂文庫蔵本	×	○	○（一首）
⑫	雅俗文庫蔵本	○	○	×
⑬	鶚軒文庫蔵本	○	○	○（二首）
⑭	与楽園叢書本	○	○	○（二首）
⑮	三原市歴史民俗資料館蔵本	○	○	○（二首）
⑯	大東急記念文庫蔵本	○	○	○（二首）
⑰	桜圃寺内文庫蔵本	○	○	○（二首）
⑱	『世界』所収本 ※15～18巻のみ確認済み	○	—	—

四－四　上下巻の分割の有無

上下巻の分割については、A・B系統は、⑫雅俗文庫蔵本を除いて、すべての本が巻を分かたず、C系統はすべての本が上下巻に分かれている。このように、上下巻の分割によって諸本を分類した場合も、ほぼ紀行本文による分類と一致するが、次節に述べるように、⑫雅俗文庫蔵本のみ特殊な位置にある。

【表4】　各系統における上下巻の分割

		上下巻の分割
①	「自筆文稿」	／
②	「自筆詩稿」	／
③	「自筆浄書本」	×
④	頼山陽史跡資料館蔵本	×
⑤	『春水遺響』所収本 ※未見	—
⑥	『崇文叢書』所収本	×
⑦	早稲田大学図書館蔵本	×
⑧	光丘文庫蔵本	×
⑨	慶應義塾大学図書館蔵本	×
⑩	謄写版本	×
⑪	懐徳堂文庫蔵本	×
⑫	雅俗文庫蔵本	○
⑬	鶚軒文庫蔵本	○
⑭	与楽園叢書本	○
⑮	三原市歴史民俗資料館蔵本	○
⑯	大東急記念文庫蔵本	○
⑰	桜圃寺内文庫蔵本	○
⑱	『世界』所収本 ※15～18巻のみ確認済み	○

四－五　雅俗文庫蔵本における本文の混在

⑫雅俗文庫蔵本は、本文はB系統でありながら、C系統の諸本と同じように、上下巻に分かれるという特殊な性質を持っている。さらに、紀行本文についても、次に引く閏六月五日の記事は、B系統の本文を基調としながら、C系統の本文が一部混じるという、他の諸本とは異なる様相を見せている。なお、この箇所については異同が多いため、全ての引用文に訓読を付す。

B系統（⑫雅俗文庫蔵本）

魯卿曰、羽黒三山、亦一方之鎮也。我羽之勝景、於是乎畢。子盍往乎。吾請為子鉞。国器、快翁、送余。数百歩而別。二子之郎及其塾生、魯卿弟、皆送。

（魯卿曰く、「羽黒三山、亦た一方の鎮なり。我が羽の勝景、是に於いてか畢きん。子盍ぞ往かざるか。吾請ふ子が鉞（筆者注：先導の意）を為さん」と。国器、快翁（筆者注：伊藤見璞、中川良純のこと）、余を送る。数百歩にして別る。二子の郎及び其の塾生、魯卿の弟、皆な送る。）

酒田における曽根原魯卿との交流を描いた箇所であり、魯卿が、出羽三山の景勝の素晴らしさを説き、春水が出立するのを人々が見送る様が描かれている。⑫雅俗文庫蔵本の本文は、基本的に、B系統の本文であるが、二重傍線部「子盍往乎。吾請為子鉞（子盍ぞ往かざるか。吾請ふ子が鉞を為さん）」は、C系統に特有の表現である。以下に諸本の異同を掲げ、本文に即して分析を行ってゆく。

稿本段階（①「自筆文稿」）

魯卿謂、羽山三峰、我羽之□（万古之）鎮也。又未嘗不経于此。余請為導意惜別。杖履至此、羽之勝尽矣。遂乃決策治行。国器、快翁二子、携手而行、数百歩而決。二子之子及塾生、魯卿之弟、皆送。

（魯卿謂く、「羽山三峰、我が羽の万古の鎮なり。杖履（ぢやうり）もて此に至らば、羽の勝は尽きん」と。遂に乃ち策を決して行を治む。国器、快翁二子、手を携へて行き、数百歩にして決（わか）る。二子の子及び塾生、魯卿の弟、皆な送る。）

A系統（③「自筆浄書本」）

魯卿謂、羽山三峰、我羽万古之鎮也。杖履至此羽、羽之勝尽矣。遂乃決策治行。国器、快翁二子、携手而行、数百歩而訣。二子之郎及其塾生、魯卿弟、皆送。

（魯卿謂く、「羽山三峰、我が羽万古の鎮なり。杖履もて此羽に至らば、羽の勝は尽きん」と。遂に乃ち策を決して行を治む。国器、快翁二子、手を携へて行き、数百歩にして訣る。二子の郎及び其の塾生、魯卿の弟、皆な送る。）

B系統（⑪懐徳堂文庫蔵本）

魯卿曰、羽黒三山、亦一方之鎮也。我羽之勝景、於是乎畢。我不可不通。乃出。国器、快翁同出、二子携手而行、数百歩而別。二子之郎及其塾生、魯卿弟、皆送。

（魯卿曰く、「羽黒三山、亦た一方の鎮なり。我が羽の勝景、是に於いてか畢きん。我通ぜざるべからず」と。乃ち

出づ。国器、快翁同に出て、二子手を携へて行き、数百歩にして別る。二子の郎及び其の塾生、魯卿の弟、皆な送る。）

C系統（⑬鶚軒文庫蔵本）

魯卿曰、羽黒三山、亦一方之鎮也。我羽之勝、於是乎畢。子盍往乎。吾請為子鉞。国器、快翁、父子及塾生、皆送。（魯卿曰く、「羽黒三山、亦た一方の鎮なり。我が羽の勝、是に於いてか畢きん。子盍ぞ往かざるか。吾請ふ子が鉞を為さん」と。国器、快翁、父子及び塾生、皆な送る。）

まず、⑫雅俗文庫蔵本と⑪懐徳堂文庫蔵本を比較すると、傍線部については字句が一致しており、⑫雅俗文庫蔵本がB系統の本文を基調としていることが理解される。一方で、⑫雅俗文庫蔵本には、B系統に特有の文章「我不可不通。乃出（我通ぜざるべからずと。乃ち出づ）」（点線傍線部）がなく、代わりに、C系統に特有の文章「子盍往乎。吾請為子鉞（子盍ぞ往かざるか。吾請ふ子が鉞を為さん）」（二重傍線部）が挿入されている。なお、この文章は『国語』晋語二を利用したものである。

このような現象が起きた理由は、明確な根拠がないため明らかにし得ない。ただ、C系統に特有の文章（閏六月五日の箇所）が、上巻と下巻の境目に位置することは注目に値する。この現象は、B系統の本を書写しつつ、同時にC系統の本を参照し、上下巻に分割する際に、C系統の本文が混入してしまったことによるのではないだろうか。ただ、明確な証拠がないため、現時点では、⑫雅俗文庫蔵本が特殊な位置にあることを述べるにとどめる。

五　書承関係から考えるB系統の諸本

最後に奥書などからわかる写本同士の書承関係について説明する。すでに述べたように、本来、こうした諸本間の関係を直接的に示す情報については、早い段階で提示すべきであるが、本資料については、本文による分類を行った上で、こうした情報を重ねた方がより有益な知見につながると考え、この段階で提示する。

注目したい点は、『負剣録』の諸本の中には、次のような識語を持つものがあるということである。

訊齋先生携一巻来示余曰、是頼春水親写東北遊日記、負剣録。最為稀世之珍。請一言以題。（中略）大正十年辛酉冬十一月　晩生　小山正武謹識（訊齋先生一巻を携へ来って余に示して曰く、「是れ頼春水親写の東北遊日記、負剣録なり。最も稀世の珍たり。請ふ一言して以て題せん」と。（中略）大正十年辛酉冬十一月　晩生　小山正武謹識）

この識語は、⑦早稲田大学図書館蔵本・⑧光丘文庫蔵本・⑨慶應義塾大学図書館蔵本、すなわち、B系統に属する本の一部に見られるものである。文章には、訊齋先生という人物の名が見えるが、新潟県柏崎市出身の、明治期に活躍した政治家の丸田訊齋[11]である。識語を作成した小山正武は、桑名藩出身の、同

じく明治期の政治家である。[12]

この識語からは、丸田がある日春水自筆の『負剣録』を携え、稀覯本であるとして、小山に題を請うたことがわかるが、この識語を共通して持つ三本は、いずれも、丸田所蔵の春水自筆の『負剣録』を祖とするものであり、近代以降に成立したということである。ただし、この丸田訊齋旧蔵春水自筆本については、現在所在がわかっておらず、詳細は不明である。[13]

このことは、とくにB系統の諸本が、付録詩を持つものと持たないものとに分かれることを説明する上で、重要な認識を与える。すなわち、⑦早稲田大学図書館蔵本・⑧光丘文庫蔵本・⑨慶應義塾大学図書館蔵本の三本は、他のB系統の諸本とは本文は同じでありながら、書写のルートについては別なのである。ここから考えられるのは、大正年間に存在した、付録詩を持たない春水自筆のB系統の祖本が一度流布し、その後、さらにB系統において、詩が本文へ統合されたと考えられるのである。

なお、諸本の書写年代に関しては、明確にわからないものも多いが、まとめると次表の通りである。

【表5】『負剣録』諸本の成立年代の推定とその根拠

	成立年代の推定とその根拠
① 「自筆文稿」	〔明和七年〈一七七〇〉閏六月～同年七月〕写。 『負剣録』が、紀行としての体裁が整い、一応の完成を見たのは、紀行本文末尾の記述「庚寅七月望後／竹原彌太郎頼惟寛書」から、明和七年七月であると考えられる。「自筆文稿」は、それまでの文章作成の過程を示すものである。
② 「自筆詩稿」	〔明和七年～文化十年（一八一三）〕写。 下限については、「自筆詩稿」の詩は、後にB系統の一部の諸本に付される。この付録詩を有するB系統の上限が、⑪懐徳堂文庫蔵本の書写奥書より、文化十年であるため、この年と推定した。
③ 「自筆浄書本」	〔明和七年七月～文化十三年〕写。 上限は、①で述べたように、A系統の成立の上限、明和七年七月である。下限は、自筆の写本であることを鑑みて、頼春水の没年とした。
④ 頼山陽史跡資料館蔵本	〔大正～昭和年間〕写。 ・『広島頼家関係資料目録』（七十一頁、管理番号Ⅳ－619）の記述では、頼古棋編と推定されている。
⑤ 『春水遺響』所収本 ※未見	〔大正～昭和年間〕写。 ・『広島頼家関係資料目録』（七十二頁、管理番号Ⅳ－682－10）の記述では、「扉題「東遊負剣録」に『拠春風館所蔵本』との記載あり」と記される。目録の記述から、春風館に蔵される③自筆浄書本が底本であると推定した。
⑥ 『崇文叢書』所収本	昭和六年（一九三一）刊。 ・底本未詳。

⑦	早稲田大学図書館蔵本	大正年間写。 ・小菊逸鑑（大正十年〈一九二一〉七月）の奥書、小山正武（同年十一月）の識語あり。これらはいずれも写しである。
⑧	光丘文庫蔵本	大正年間写。 ・小菊逸鑑（大正十年七月）の奥書、小山正武（同年十一月）の識語あり。いずれも写しである。
⑨	慶應義塾大学図書館蔵本	昭和六年（一九三一）写。 ・小菊逸鑑（大正十年七月）の奥書、小山正武（同年十一月）の識語、須田古龍（昭和三年〈一九二八〉）、甲崎環（昭和六年〈一九三一〉一月）の奥書あり。いずれも写しである。 ・書写奥書「依酒田港甲嵜環氏所蔵本昭和六年四月十六日謄写了」ここから、⑧光丘文庫蔵本の写しをさらに書写したものとわかる。
⑩	謄写版本	成立年未詳。 ・酒田光丘文庫に所蔵されるほか、筆者架蔵本があり、ある程度流通したとみられる。
⑪	懐徳堂文庫蔵本	文化十年写。 ・中谷敬信（文化十年）の書写奥書あり「文化十癸酉仲秋書于聴雨軒之下／中谷敬信（印「敬信」）」。
⑫	雅俗文庫蔵本	〔近世後期〕写。 中野三敏氏は「「葭の根屑」掘りのこし」において、化政年間の成立であると推測している。
⑬	鶚軒文庫蔵本	〔近世後期〕写。 ・蔵書印「槐雨／山樓／叢書」が捺されている。「槐雨山樓」は、岡山藩の医者、赤石士道が文化四年（一八〇七）に設けた書斎の名である。
⑭	与楽園叢書本	〔文政年間頃〕写。 ・『与楽園叢書』の成立時期は、『広島市立中央図書館浅野文庫目録』（広島市立中央図書館、二〇一五年）によると、文政年間頃（一八一八～一八三〇）であり、その時期の成立と推定される。 大正四年（一九一五）写。 ・⑭与楽園叢書本の副本。 ・大正四年の書写奥書あり。「原本ハ／浅野家所蔵与楽叢書中ニアリシモノヲ謄写／ス／大正四年七月廿七日炎暑甚シキ日広島県庁内県史編輯室ニ於テ／玉井源作」
⑮	三原市歴史民俗資料館蔵本	〔明治二十九年〈一八九六〉写。 ・巻末、匡郭外に「丙申四、一五、傭書（筆者注：人を雇って書写させること）」と記される。筆写の様態などから、「丙申」は明治二十九年（一九〇六）。この年の書写と考えられる。
⑯	大東急記念文庫蔵本	明治年間〕写。 ・高島張輔の書写奥書によると、某氏から借りた『負剣録』を明治年間に写し、その
⑰	桜圃寺内文庫蔵本	

		〔後、大正十三年に奥書を書き足した。「十餘年前、予手写此本、久蔵筐中。今茲暑日、偶肢筐／読之、而忘其借誰氏本及写録年月。因記其由。大正甲子八月初四連旱得雨快甚／東京青山僑写　七十九翁九峰張」
⑱	『世界』所収本 ※15～18巻のみ確認済み	・京華日報社『世界』第十五号（明治三十八年（一九〇五）八月）～第十八号（同年十一月）まで確認済み。いずれも東京都立多摩図書館に所蔵される。 ・⑰桜圃寺内文庫蔵本が底本である。

六　『負剣録』の成立過程と流布状況

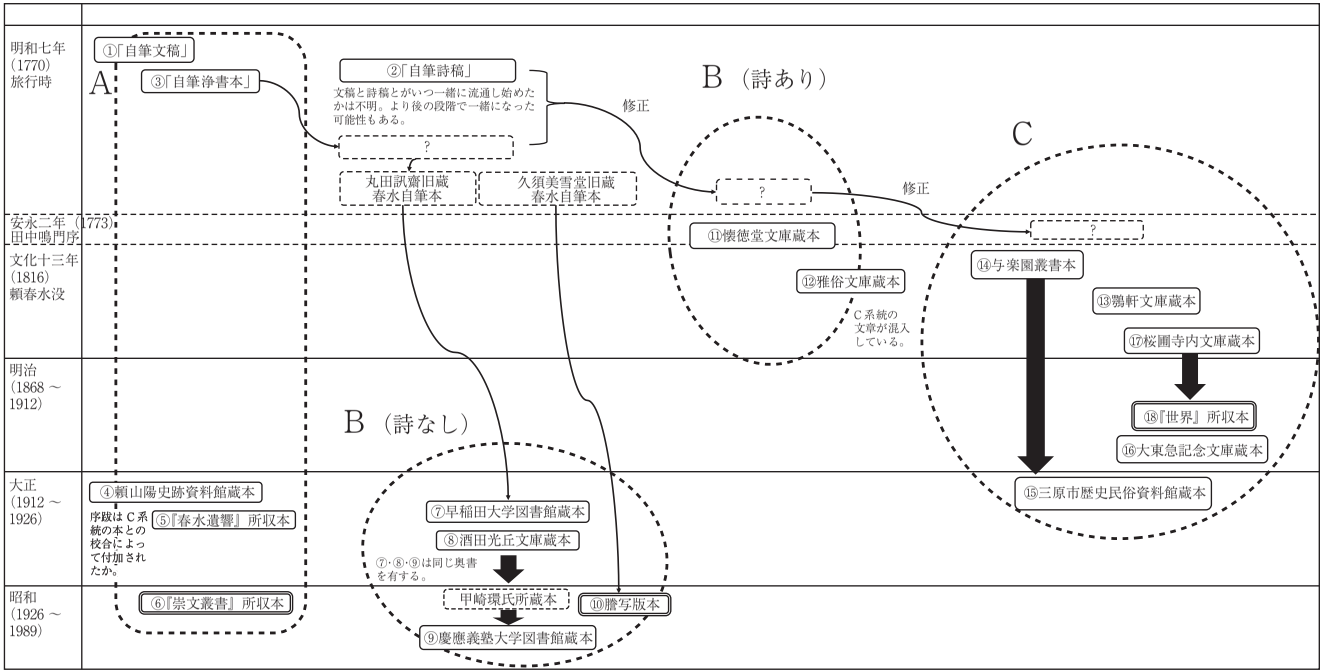
以上に見た情報を総合し、どのように『負剣録』の諸本が成立したのかを、図を用いてあらためて俯瞰する。次頁に示す図は、それぞれの本についての、書写年代や書承関係を一覧にしたものである。

図の縦軸は、時間を表し、下に行くほど、今日に近くなる。横軸は、原稿の生成過程を示すものであり、右に行くほど、『負剣録』の原態から遠くなる。それぞれの諸本を囲む線については、実際に確認し得たもの、また、現在、存在することが確実なものを実線で、存在するのではないかと考えられるが確認できないものを点線で表した。また、矢印については、奥書などから、直接の書承関係が明確なものを、直線の太い矢印で示している。

確認し得た『負剣録』のうち、最も早く成立したのが「自筆文稿」である。この本は、先述したように、紀行の草稿と見られる断片的な記事が書かれている。記事の順序は必ずしも旅の行程に沿ったものではなく、未整理の原稿の段階である。この段階を経て、A系統の本文を有する「自筆浄書本」が成立した。この本は、「自筆文稿」とは異なり、記事が時系列に並んでおり、また、字は楷書で丁寧に書かれている。つまり、「自筆浄書本」において、『負剣録』は一旦の完成をみたと判断し得る。そこから、B系統へと変化するが、B系統の初期の形態は、⑦早稲田大学図書館蔵本に代表されるような、付録詩のないかたちであったのだろう。その後、B系統のある段階で、紀行本文に付録詩が加えられ、⑪懐徳堂文庫蔵本や⑫雅俗文庫蔵本のような、紀行本文と付録詩とが一体となった形態が標準的になったと考えられる。さらにそこから、B系統の付録詩を有するかたちが引き継がれ、本文や付録詩の語句が改変され、C系統が成立した。

二度の改変が、それぞれ誰の手によって行われたのかということについて、A系統からB系統への改変は、春水自身の手で行われた可能性が極めて高い。その理由は、「自筆文稿」において、殺生石の伝承の考証を『負剣録』に挿入する構想があったことがうかがえるが、A系統では簡潔に記されるのみであり、B系統で「自筆文稿」の構想を反映しつつ、考証を詳細に記述しているからである。[14] B系統からC系統への改変は、春水自身の手で行われたかどうか不明である。春水没後に、山陽が『負剣録』を添削したことが書簡から明らかになっており、[15] 山陽による改変の可能性も考えられる。

【図１】『負剣録』諸本の分類図



おわりに

本稿では、『負剣録』の各写本間の異同について網羅的な調査を行い、諸本の分類について、紀行本文の異同を基準に、三つの系統に分類できることを確認した。この分類は、詩の有無や序跋、上下巻などの諸要素と比較しても、齟齬をきたすものではなく、分類として妥当性を持ったものと考えられる。

本稿で行った諸本整理によって、さまざまな特質を持つ『負剣録』の本文の成立過程が明らかになり、そこから春水の執筆方法を分析することが可能になるのである。

（1）⑤『春水遺響』所収本については未見であるが、『広島頼家関係資料目録』（広島県教育委員会、二〇二一年）から情報を得た。目録の記述については、表5⑤参照。

（2）『負剣録』は、『崇文叢書』第二輯第三十八巻に収録され、昭和六年（一九三一）に出版された。ただし、底本は未詳である。

（3）⑩謄写版本について、匡郭様の枠の中に『負剣録』の本文を手書きで翻刻し、孔版印刷したもの。底本未詳。

（4）⑱『世界』所収本について、京華日報社『世界』第十五号（明治三十八年（一九〇五）八月刊）以降、数号にわたり『負剣録』が分載された。なお、『世界』は稀覯本であり、筆者が確認し得たのは、第十五巻～第十八巻である。これらはいずれも東京都立多摩図書館に所蔵される。

（5）この箇所では、山括弧はその文章が双行であることを、スラッシュは改行を示す。

（6）付加された可能性と同時に、別のルートで写本が作成されていた可能性がある。

（7）五十八首を収録する本は、五十九首を収録する本と比べて、遠江国白須賀の景勝地を詠った「観潮阪」が欠落している。これは、書き落としなどの事情を考えてよいのではないだろうか。

（8）⑪懐徳堂文庫蔵本は、「過藤花菴」の第八句第七字が脱落している。

（9）A系統のうち、④頼山陽史跡資料館本は序跋を有するが、序跋は紀行本文とは別筆であり、後人が頼家に伝わるいずれかの資料を書写しつつ、C系統の別本に付された序跋を書き写したということと推定される。

（10）序跋・題詩の字句については、B系統とC系統との間で細かな点で違いがある。一例として、頼春風の跋に関して、B系統とC系統の文章を比較する。訓読はB系統にのみ付した。B系統（⑪懐徳堂文庫蔵本）「不日遂帰。家君嬰鍔、家兄壮気。陪旧乃解装得之録。詳哉。其状之也、猶之兄弟更番負剣（不日遂に帰る。家君嬰鍔、家兄壮気、陪に旧す。乃ち装を解きて之の録を得たり。詳なるかな。其れ之を状ぶるや、猶ほ之れ兄弟、更番、剣を負ふがごとし）。」C系統（⑬鶚軒文庫蔵本）「無幾遂帰。家君嬰鍔、家兄壮気。陪旧乃解装得之録。詳哉。其状之也、読之数四、猶之兄弟更番負剣。」B系統の傍線部「不日」は、C系統では「無幾」となっている。また、C系統の二重傍線部「読之数四」はB系統にはないなどの異同がある。

（11）柏崎市『「柏崎の先人たち」柏崎・刈羽人物誌』（柏崎市、二〇〇二年）の「丸田尚一郎」という記事に拠る。

（12）加太邦憲『加太邦憲自歴譜』（加太重邦、一九三一年）の「小山正武伝」という記事に拠る。

（13）ここで述べた丸田訊齋旧蔵春水自筆本とは別に、春水自筆本『負剣録』が存在することが市島春城の日記に書き残されている。なお、春城は、⑦早稲田大学図書館蔵本の旧蔵者である。『雙魚堂日誌』（早稲田大学図書館蔵、請求記号：イ１９１９５８２）大正十年八月四日の記事には、春城がこの日に、久須美雪堂という新潟県長岡市の実業家から、春水自筆の『負剣録』を借りたことが書かれている。つまり、今日は所在が不明であるが、大正期には、B系

統の本文を有する春水自筆本が、二点あったということがわかる。

(14) 「自筆文稿」において、春水は土地の者から聞いた、殺生石に関する伝承を記している。具体的には、徳川光圀が殺生石を封じたために、人々が石にたやすく近づくことができなくなったという内容であり、出典などの詳細は不明である。三系統すべての本文に殺生石に関する記述が見えるが（六月十一日の記事）、光圀の伝承はA系統では触れられず、B系統において初めて記される。春水は、「自筆文稿」の段階、すなわち、『負剣録』の構想段階から、殺生石にまつわる光圀の伝承に関心があった。B系統における、この伝承を詳述しようとする執筆態度は、春水のものであり、B系統への改稿は春水によるものであると考えられる。

(15) 山陽が『負剣録』を添削した事情については、文政五年（一八二二）十月十四日頼山陽春風・杏坪宛て書簡に記されている。関係する部分を抜粋する。「先君御詩文・随筆も固より力一杯刪修仕候。一通初本に選定候処、詩文とも旁通御理申上度奉存候。負剣録は、余程刪潤仕候て、如此相成候。畢竟御少作、不必収録と奉存候」。すなわち、山陽は、『春水遺稿』に『負剣録』を収録することを見込んで本文を修正したが、修正の程度が甚だしくなったことや、春水の青年期の作品であることを理由に収録を見送った。なお、この書簡の本文は、徳富蘇峰、木崎愛吉、光吉元次郎編『頼山陽書簡集』上巻（民友社、一九二七年）に収録される。

付記　資料の閲覧に際し、左記の所蔵機関に格別のご配慮を賜りました。篤く御礼申し上げます。
大阪大学附属図書館、九州大学附属図書館、酒田市立光丘文庫、大東急記念文庫、広島市立中央図書館、三原市歴史民俗資料館、山口県立大学図書館、頼山陽史跡資料館、早稲田大学図書館
また、本稿は、第四十一回九州近世文学研究会における発表をもとに加筆修正したものである。席上にてご教示を賜りました天野聡一先生、勝又基先生、亀井森先生、川平敏文先生、菊池庸介先生、高橋昌彦先生、ならびに本稿をなすにあたり、ご教示を賜りました神作研一先生、住吉朋彦先生、花本哲志先生に深謝申し上げます。

（あさい・まゆ）